

NO.	タイトル	2011 年における太平洋沿岸域のマイワシとカタクチイワシのセシウム 137 濃度の推移
氏名 (所属) : 高木香織・小熊幸子・帰山秀樹・重信裕弥・藤本 賢・小埜恒夫 (中央水産研究所・海洋・生態系研究センター・放射能調査グループ)・渡邊朝生 (中央水産研究所・海洋・生態系研究センター)・森永健司・中田 薫 (水研センター本部)		
学会名等 : 平成 24 年度日本水産学会秋季大会		開催日 : 平成 24 年 9 月 14~17 日
口頭発表・ポスター発表		備考

【発表内容】 2011 年 3 月に発生した東京電力福島第一原子力発電所事故により、人工放射性核種が環境中に放出され、海産生物に影響を与えている。本研究では、事故直後の春季から秋季 (2011 年 3 月 16 日~11 月 28 日) に主に常磐~房総海域で漁獲された回遊性魚類であるマイワシおよびカタクチイワシの魚体中のセシウム 137 ( $^{137}\text{Cs}$ ) 濃度 (Bq/kg-wet) の推移について報告する。

各魚種の魚体全体・筋肉・内臓試料の  $^{137}\text{Cs}$  濃度を測定したところ、マイワシの魚体全体および筋肉試料では 7 月に最も高い 18 Bq/kg-wet を検出したが、これを除くと調査期間を通して 15 Bq/kg-wet 未満で推移した (図)。同じく内臓試料では 6 月に 41 Bq/kg-wet を検出したが、これを除くと 25 Bq/kg-wet 以下で推移した (図)。カタクチイワシについては 3 月と 8 月の各月に内臓 1 試料から 49 および 33 Bq/kg-wet を検出したが、これを除く内臓・魚

体全体・筋肉試料からは 25 Bq/kg-wet 以下を検出した。事故前の 2005~2009 年におけるマイワシの平均  $^{137}\text{Cs}$  濃度は魚体全体 (内臓を除く) で 0.044 Bq/kg-wet、筋肉では 0.054 Bq/kg-wet、そして内臓では 0.041 Bq/kg-wet であった。これら回遊性魚類の  $^{137}\text{Cs}$  濃度が事故前の状況になるまでに要する期間を見積もるためには、魚類に加えて海水や、餌となるプランクトンについても継続的なモニタリング調査が必要となる。

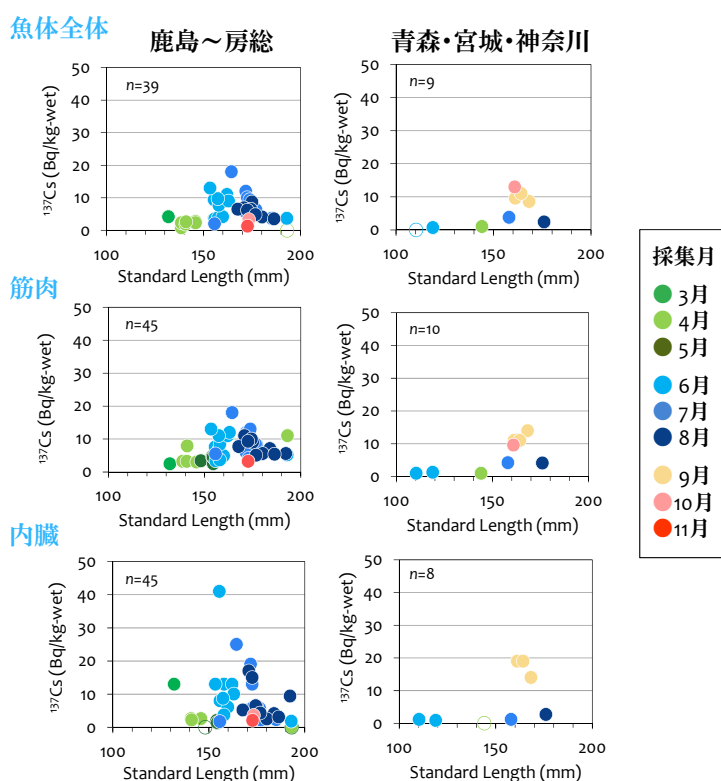


図. マイワシの採集月別  $^{137}\text{Cs}$  濃度. 白抜きは検出限界未満.